



Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ 第94回演奏会

2024年2月11日(日)

杜のホールはしもと

【プログラム】

ベートーヴェン	バレエ「プロメテウスの創造物」序曲 Op.43
モーツァルト	交響曲第25番ト短調 K.183(173dB)
	♪ ♪ 休憩 ♪ ♪
シューマン	交響曲第1番変ロ長調 Op.38 「春」

【曲目紹介】

◆ベートーヴェン:バレエ「プロメテウスの創造物」序曲Op.43

バレエ「プロメテウスの創造物」は、ベートーヴェン(1770～1827)が1800～01年にギリシャ神話を題材にして書いたバレエ音楽で、序曲、導入部(第1幕への序奏)と16曲のバレエ音楽から成っています。このバレエ音楽の第16曲「フィナーレ」は、交響曲第3番「英雄」の第4楽章に転用されています。また、「嵐」と題された導入部は、同第6番「田園」の第4楽章「雷雨・嵐」の基になっていると言われています。

この序曲が作られた時期は、交響曲で言うと第1番(1799～1800年)と第2番(1801～02年)の間に当たります。そのため、これらの交響曲との共通点があります。この曲はハ長調で、短い序奏と主部から成っていますが、普通は主和音で始まる序奏の冒頭が属七和音(ド・ミ・ソ・シ♭)で始まっています。これらのことは第1番第1楽章と全く同じです。また、この曲の序奏の主旋律は「ソ・ド・レ・ミ(階名)」で始まりますが、これは、第2番第2楽章の主題と共通しています。この曲の作曲の経緯はよく分かっていません。もしかすると、着想は第1番以前からあって、二つの交響曲の基になっているのかもしれない。

「プロメテウスの創造物」は、原語(ドイツ語)では「Die Geschöpfe des Prometheus」です。Die Geschöpfeは「神の創造物」ですが、「人間」という意味もあります。プロメテウスはギリシャ神話に登場する男神で、天界から火を盗んで生肉とともに人間に与えて救済したという話は有名です。「我々が焼肉を食べられるのは、プロメテウスのお蔭だ。」と学校の先生から教わったような気がします。余談ですが、プロメテウスの「プロ」には、プロローグと同じ「前の」「先の」という意味があります。プロメテウスには弟がいて名前を「エピメテウス」と言います。この「エピ」は、エピローグと同じ「後の」を意味します。つまりプロメテウスは「先に生まれたメテウス」すなわち「兄のメテウス」を意味しています。メテウスには「考える者」という意味があり、プロメテウスは「先に考える者」すなわち「先見の明を持つ者」、エピメテウスは「後に考える者」すなわち「後知恵の者」と、兄弟を対比しているとも言われています。

◆モーツァルト:交響曲第25番ト短調K.183(173dB)

この曲は、1985年に日本で公開された「アマデウス」というモーツァルトを題材にした映画の冒頭、サリエリが自らをナイフで切り付け、担架で運ばれていくというショッキングなシーンの挿入曲として使われたことで、一躍有名になりました。

モーツァルト(1756-91)は、3回目のイタリア旅行から帰った後、1773年～74年の間に9曲の交響曲を書き上げます。この交響曲群は、26・27・22・23・24番(作曲順)の5曲とその後にかかれた25・28・29・30番(同)の4曲の二つのグループに分けられます。(曲番号は必ずしも作曲順には付けられていません。)この二つのグループには大きな違いがあります。前者はイタリア序曲風の3楽章形式の交響曲で、演奏時間は10分程度です。それに対し、後者はウィーン風の4楽章形式の交響曲で、演奏時間も20分～30分と規模が大きく、成熟度も高くなっています。1773年10月(17歳の時)に完成したこの曲(第25番)は、その第2グループの最初の曲に当たります。

この曲は短調ですが、モーツァルトの交響曲の中で短調の曲は、わずか2曲(全体50曲余として約4%)しかありません。もう一つは第40番で、どちらもト短調です。宮廷音楽がメインの時代に、暗い短調の曲を書くのはなかなか難しいことなのでしょう。それでもハイデンには短調の交響曲が11曲(全体100曲余として約10%)あるので、モーツァルトの短調率の小さいことが分かります。

この曲の楽器編成は、管打楽器がオーボエ、ファゴットとホルンのみで、しかも通常2本のホルンが4本(G管・B管各2本)という編成です。ない楽器が多いにも関わらずホルンが4本という変則的な楽器編成と、特にホルンが難しいことから、アマチュア・オーケストラではあまり取り上げられません。

この楽器編成やト短調で4楽章形式という構成は、数年前にかかれたハイデンの交響曲第39番ト短調と同じことから、この曲はその影響を受けていると言われています。しかし、シンコペーションで始まる第1楽章は、ハイデンが1768年に書いた交響曲第26番ト短調とそっくりで、モーツァルトはそこから主題のインスピレーションを得ていると思われます。なお、ハイデンの第26番と第39番は番号が離れていますが、最近の研究で、第39番は第26番と同じ時期(1768年頃)にかかれたという説が有力になっています。モーツァルトは同時期にこの2曲の短調の交響曲を聴いて影響を受けたのではないのでしょうか。

第1楽章 Allegro con brio ト短調4/4拍子

序奏はなく、いきなり激しいシンコペーションではじまる主題が印象的です。「コン・ブリオ(活気をもって)」と標記されています。ベートーヴェンの交響曲ではよく見かけますが、モーツァルトの交響曲では他に例がありません。それだけ強い思い入れがあったのかもしれない。

第2楽章 Andante 変ホ長調 2/4拍子

ヴァイオリンの下向音型に半拍遅れたヴィオラとさらに半拍遅れたチェロ・バスが一組になってヴァイオリンと対話するように伴奏し、さらにファゴットがヴァイオリンに1拍遅れて後追いするという、説明するのが難しい複雑な構造の主題で始まりますが、聴くと一つの自然な流れになっているのが見事です。ユーモラスでハイドンを思わせる楽章です。

第3楽章 Menuetto ト短調 3/4拍子 - Trio ト長調 3/4拍子

メヌエットは全楽器のユニゾンで始まります。珍しくホルンも旋律に参加しているのですが、2種類の管(G管とB管)を組み合わせても当時のナチュラルホルンでは出ない音(実音でF#)があり、その音が抜けています。気が付かないかもしれませんが、

トリオはト長調に変わり、弦楽器はお休みで、オーボエ、ファゴット、ホルン(各2本)が六重奏を奏でます。

第4楽章 Allegro ト短調 4/4拍子

この楽章は弦楽器のユニゾンで始まります。この第1主題は第3楽章と類似しています。主題の後半にはヴァイオリンがシンコーペーションで伴奏しますが、第1楽章を連想させます。

◆シューマン:交響曲第1番変ロ長調Op.38「春」

シューマン(1810-56)は、かつてのピアノの恩師であり、妻クララの父、フリードリヒ・ヴィークの妨害にあつてなかなかクララとは結婚ができませんでした。法律上正式に結ばれるのは1840年8月で、シューマンは30歳になっていました。

この曲は、そんな人生の絶頂期にあつた1841年に完成しています。そんな状況もあつてか、初稿では「春」という標題が付けられ、各楽章にもそれぞれ春にちなむ標題が付けられていました。ところが、シューマンは出版の際に、それらの標題を削除してしまいます。その理由は、「標題音楽のような先入観」をもってこの曲を聴いて欲しくないからだと言われています。今回の演奏会では、「人生における春を表した交響曲」という「先入観」を持って聴いて欲しいので、あえてこの標題を付けています。

この曲の第1楽章の序奏は、ホルンとトランペットによるファンファーレで始まりますが、初稿ではこのファンファーレが3度低かったようです。初演の際、当時のナチュラルホルン・トランペットでは出ない(出にくい)音があることを指揮に当たっていたメンデルズゾーンから指摘され、変更したと言われています。バルブ付のホルンは1814年に、ピストン付のトランペットは1839年に発明されていましたが、頑なにナチュラル楽器を使用するオーケストラが多かったようです。いずれにしてもシューマンが金管楽器のことをよく理解していなかったことは事実でしょう。

シューマンの交響曲については、批判する人もいますが、後代の作曲家に影響を与えたことは忘れてはならないでしょう。この曲の第2楽章や第3番「ライン」の第1楽章の途中などには、「ドーソーミーレドー(階名)」というシューマンが好んで使用したモチーフが出てきます。ブラームスは交響曲第3番第1楽章の主題にこのモチーフを使用しています。また、この曲の第1楽章や第4番の第4楽章などに多用されている「ターンタタ・タ・」というリズムもシューマンが好んで使用したリズムです。ポロディンの交響曲第1番はシューマンの影響を受けていると言われていますが、特に第4楽章の主題にこのリズムが使われています。さらに、チャイコフスキーの交響曲第3番「ポーランド」は5楽章形式ですが、これは「ライン」の影響と思われる。特に第2楽章と第3楽章(ゆったりとしたドイツ風舞曲と緩徐楽章)の構成は「ライン」によく似ています。このように、音楽史上、シューマンの交響曲の影響力は意外と大きいのです。

第1楽章:Frühlingsbeginn(春のはじまり) Andante un poco maestoso 変ロ長調4/4拍子-Allegro molto vivace 変ロ長調2/4拍子

「春のはじまり」は、日本では立春ですが、ドイツでは春分の日のことのようです。序奏は、ホルンとトランペットのファンファーレに始まり、弦楽器が応えます。主部の第1主題のモチーフはこのファンファーレを縮めたもので、このモチーフが楽章全体を支配しています。第2主題では、弦楽器のピチカートを伴った木管楽器の旋律の裏でヴィオラが細かい音で伴奏しています。シューマン独特のオーケストレーションです。

第2楽章:Abend(夕べ) Larghetto 変ホ長調 3/8拍子

夕べに恋する人の窓の下で奏でるセレナーデでしょうか。ときどき出てくるかに心をえぐられます。シューマンならではの美しい旋律を第1ヴァイオリンが奏でると、2回目はチェロ、3回目はオーボエとホルンへと移っていきます。その都度リズムが細かくなっていく伴奏は、「運命」の第2楽章を思わせます。コーダでは第3楽章の主題を予告してそのまま切れ目なく第3楽章に入ります。

第3楽章:Frohe Gespielen(楽しい遊び) Scherzo, Molto vivace ニ短調3/4拍子 - Trio I, Molto più vivace ニ長調 2/4拍子 - Trio II 変ロ長調3/4拍子

「遊び」は誤訳で、Gespielenは「(いい意味での)愛人」ではないかと思われま。3回登場するスケルツォの間に二つの異なるトリオが挟まれています。トリオIIには速度記号がないため、スケルツォのままのテンポか、トリオIのように速くするのか、指揮者を悩ませます。コーダではトリオIを回想し、静かに終わります。

第4楽章:Voller Frühling(たけなわの春) Allegro animato e grazioso 変ロ長調 2/2拍子

短い序奏の後、第1ヴァイオリンによる戯れるような第1主題に始まります。第2主題は、木管楽器によるおどけた行進曲風な旋律に始まり、弦楽器がこの楽章の序奏の音型で応えるという2つの部分の繰り返しからできています。前半のおどけた旋律は、自身のピアノ曲集「クライスレリアーナ」の第8曲(終曲)のリズムの変形です。

【指揮者プロフィール】

平川 範幸
(ひらかわのりゆき)



福岡県出身。福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生<指揮専門>にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講。その模様がNHK「クラシック音楽館」にて放送される。

新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団の下で活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者の下で研鑽を積む。

2016年、サントリーホールで開催された「こどもたちのコンサート」特別公演にて、ウィーン・フィルのメンバーと仙台ジュニアオーケストラの合同演奏を指揮する。同年、浜松フィルハーモニー管弦楽団の演奏会にて、ベルリン・フィルのオーボエ奏者、クリストフ・ハルトマンやクラリネット奏者のヴェンツェル・フックス、ホルン奏者のシュテファン・ドウ・ルヴァル・イエジエンスキーの各氏らと共演する。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、大阪交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニー管弦楽団、千葉交響楽団、九州交響楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

♪ 第94回メンバー ♪

第1ヴァイオリン	三瓶政一、☆時山響子、戸張純一、西村 実、林 俊夫、本山まり子
第2ヴァイオリン	相羽あゆみ、石嶺寿子、西川富之、宮本 敦、♪森 未知、森上由紀
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、山口 彰
チェロ	植田圭司、中山憲一、永田隆司、藤村ゆ香、♪三次摂子、
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮、
	☆コンサートマスター ♪弦楽トップ
フルート	谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	伊藤佐保子、市川亜理
クラリネット	鈴木千暁、中嶋智子
ファゴット	越島康太郎、築山道乃、星野未央
ホルン	尾形武一、金澤恵子、友田昭博、町田明子、由川 裕
トランペット	内田直大、木村 晃
打楽器	井山実莉、星野武徳
トレーナー	戸澤哲夫 (東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)
練習指揮	山上孝秋

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2024年9月23日 (月・祝)
場所：調布市文化会館たづくり
指揮：平川 範幸
曲目：未定



詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

シューマン：トロイメライ(弦楽合奏版)

でした。

シューマンの名を知らずとも、この曲を聴いたことのない人はいないでしょう。原曲は、シューマンが1838年に書いた「子供の情景」という13曲のピアノ曲集の第7曲です。この曲は、ピアノのほかにも、オーケストラやヴァイオリンとピアノなど、様々に編曲されて演奏されています。本日は弦楽合奏での演奏でした。

トロイメライは「夢」と訳されますが、この「夢」、「子供が睡眠中に見る夢」なのか「子供の将来の夢」なのか、考えると夜も眠れません。ただ、「子供の情景」の第12曲に「眠りに入る子供」という曲があるので、ここでは「将来の夢」ということにしておきましょう。



ロベルトとクララの子供たち
シューマンには8人の子供がいました